

第3回「こども条例(仮)」を考える市民ワークショップ

【日時】 令和6年1月24日(水) 午後19時00分～20時40分

【場所】 市役所地下 市民ホール

【出席】 23名
市民18名(うち3名Zoom)、事務局5名

【概要】

令和6年度「こども基本法」に基づく市の「こども計画」の策定を予定するなか、その前段階(前提)として市議会から政策提言も受けた「こども条例(仮)」の整備に向けた検討があるべきと考えたもの。

約1年間をかけ、市民の参画や関与を得て、より良い取組み内容とするよう、誰でも参加できる市民ワークショップとして第3回目を開催した。(毎月1回程度開催を予定)

【詳細】

1. 開会あいさつ(子育て支援課長)

能登半島地震被災者への追悼、支援者への経緯と感謝、大きな過渡期となる年を迎えた。

国でも高校生まで児童手当が出るなど大きく変化するなか、市でも組織改編など具体的な動きを進めている。

市民の皆さんと一緒に、できたら楽しみながら進めていきたい。やり抜こうとする意志が重要で、精一杯取り組んでいくので、今年もよろしく願いしたい。

2. 自己紹介(氏名、所属団体など)

3. 資料説明(子育て支援課長)～意見交換

テーマ「どのような個別テーマで対話したいか」

スクール形式で全体の説明を受けた後、会場3つとZoomの4グループに分かれて、意見交換を行った。

①説明資料について

②今後意見交換したいテーマなど

最後、グループ毎にどのような話が出たか、全体で共有して終了した。(別紙のとおり)

次回第4回は、2月21日(水)同時刻、201・202会議室で開催予定

意見のまとめは別紙のとおり

以上

I. 全体的な内容について

- ・前回までに出された意見や不安に思っていることに対し、市から説明や反応があったことにより、少し安心できた
- ・例として「こども、家庭に笑顔あふれるまちづくり」といった、(仮)の目指す姿を想定し、今後の議論を重ねていくなかでも、目指すゴールを共有して進めることができるのではないかと
- ・「こども、家庭」のみではなく「地域」の視点も入れて、まち全体として取り組んでいくという考え方が良いのではないかと
- ・子育ては保護者や保育園などの関係機関だけではなく、地域でも見守っていく必要があるため、イメージしやすく、心に響くようなスローガンを設定し、周知をしっかりとしていくことより、まち全体としてこども子育てを支えていけるのではないかと
- ・目指す姿を考えるよりも、細かな課題や分野から取り組んでいきたい
- ・条例は形骸化の恐れがあるとあったが、活用されている(されていない)条例はあるのか
- ・国の「こども基本法」「こども大綱」は概ね5年を目途に、見直すとされているとのことなので、市の「こども条例」なども形骸化しないように、何年かごとに検証して見直す仕組みを盛り込んでどうか
- ・大きな目標として「こども条例」の検討に向かっていくと捉えていたが、市民の意見を吸い上げるなかで、やはり「こども条例」は必要などと持っていきたいのか
- ・最終的なゴールが定まっていないので、様々なベクトル(テーマ)に議論を向けていくのか
- ・条例は堅苦しく感じるので、もう少し身近なものが良い

2. 個別のテーマなどについて

<こどもまんなか>

- ・「こどもまんなか」と言っている人たちの中心は大人になっている
- ・「こどもまんなか」とはどういうことか、大人が決めるべきではない
- ・各家庭でも「こどもまんなか」になれているだろうか

<こどもの参画>

- ・こどもの意見が反映されるように、こどもが参加することが大切である
- ・こども達が「過ごしにくい」と感じているところなど、意見や要望を聴き、それらの声が実際に反映されたという経験が大事である
- ・大人(支援者)はこどもをサポートする側であるべき
- ・まずはこどもの意見を聴くべき。テーマ別に意見交換を進めて行くのは賛成で、こどもの意見を聴くことにより、扱うべきテーマが決まるのではないかと
- ・アンケートを取ったり、学校で時間をとってもらい、意見を出してもらってはどうか

<少子化対策>

- ・支所地域から旧高山地域に引っ越す人が多いが、どういった理由からか、地域における少子化を何とかしたい
- ・地域で生まれるこどもをどうやって多くするか、少ないこども達をどう育てていくかの両面からの視点が必要となる

<居場所、遊び場>

- ・どのような居場所が求められているか、ニーズを捉える必要がある
- ・子育て中の保護者は、こどもを通じた保護者同士のつながりを欲しているが、コロナ禍の影響も受けて、そういった場や機会が減ってしまった
- ・保護者同士のつながりが希薄となっているため、子育てなどの「基準」が分からない保護者が増

えており、子育て中の親子の居場所で交流できることが大事である

- ・情報共有がしにくいことが課題である
- ・こども同士で遊ぶことが少なくなっており、親が遊ばせに連れて行くことになるが、市内には公園などの魅力的な遊び場が少ない
- ・今の時代、オンライン上にもこどもの居場所があり、こどもが幸せになれるなら居場所として認めるべきで、居場所の多様化も視野に入れる必要があると感じる

<安心>

- ・ちょっとしたことでも相談できず不安を抱える保護者もあるため、分かりやすい窓口を設置し、簡単なことから専門的なことまで相談でき、アフターフォローもしっかりとしてもらえるような機能があると、子育てしやすいまちにつながると考える
- ・ヤングケアラーなど、見過ごされたり、制度やサービスの網から漏れてしまっているこども達のことを考えてほしい
- ・大人も困ったことの多い時代だが、こども時代の困りに対してしっかりと支えられれば、大人になってからの困りが少なくなるのではないか

<教育>

- ・校区のしぼりは必要なのか、こどもに合った学校（地域や規模など）や先生を選べるようになるとうれしいと感じる

<労働>

- ・人手不足の問題に対応する必要がある
- ・共働きの人が増えているため、事業所内託児所や幼稚園の預かり保育など保育の受皿が必要となる
- ・以前は上の子を保育園に預け、下の子と密なコミュニケーションをとっていたが、二人とも預けて働く保護者が増えている

<障がい福祉・医療>

- ・飛騨市にある児童発達支援事業所は、市内の事業所と比べて非常に優れており、飛騨市に引っ越したくらいに感じている
- ・昔であれば、身近な自然に触れあったりするなかで身に付いていった力が、なかなか付いていかない時代になっているため、そういった力を育む場所などが必要ではないか
- ・障がいや病気のあるこどもが、高校卒業の年で使えなくなってしまうリハビリなど福祉サービスがとても多くて困っている。成人向けのサービスなどへの引き継ぎをしっかりとしてもらいたい
- ・医療の確保が、こどもが安心して暮らせるまちの前提条件となるため、課題などを検討するためテーマとして扱ってもらいたい

<豊かな日常>

- ・こどもが暮らしていて楽しい、将来戻ってきたいと感じられるまちになっていないのでは
- ・こどもの行動範囲が狭いことが気になる

<環境・地域>

- ・支所地域も含めた高山市の特性を考えるべきである
- ・兵庫県明石市の政策が良いと感じるが、高山市は仕事の選択肢が少ないなど地域性が大きく異なっていて単純に取り入れるのは難しい
- ・東京から移住してきた人は、高山市は子育てしやすいまちと言っている